

わたしの好きな昔話（5）

『舌切雀』（ちりめん本）



相川 瑞穂

私たちの身近にある昔話は、物語の表現がやさしく、たいへん読みやすいものになっています。しかし現代まで語り継がれてきた昔話には、もともと残忍でグロテスクな内容が含まれているものが多いのです。そして『舌切雀』も本来はそういった類のお話でした。そのあらすじはこうです。

く婆が飼っていた雀が隣家の意地悪な婆の糊を舐めたため、怒った意地悪婆に舌を切られ逃がされた。それを聞き、雀を心配した婆は爺と共に雀を探した。爺婆は雀の宿にたどり着き、歓待を受け、帰り際に大きな葛籠くつづら>と小さな葛籠をどちらか土産に選ぶよう言われると、小さな葛籠を選んで持ち帰り、その中からは宝物が出てきた。隣家の意地悪婆も真似をして雀の宿へ行き、大きい葛籠を土産に選んだが、その中からは化け物が出てきて意地悪婆は八つ裂きにされた。>（京都外国語大学図書館ホームページより）

さらに調べると、おじいさんが雀の宿を探すために何人もの人に道を尋ね、彼らが引き換え

に馬の血や牛馬を洗った水を飲ませる、などといった場面もありました。私が幼い頃読んだ『舌切雀』には、そのような場面はもちろんありません。また、意地悪なおばあさんは最後に心優しいおじいさんに説得され、改心するというものでした。物語には残忍な内容はなく、最後はみんな幸せになりました。『舌切雀』だけではなく、多くの日本の昔話は今と昔でその内容が異なっています。必要以上の残忍さは省かれ、物語を楽しみながら、勧善懲悪や報恩などを学ぶことができます。本来言い伝えられてきた残忍な内容が改変されてきたのは、明治時代以降だとされています。子どもたちが読むのにふさわしい物語とするために過激な部分は削除され、おとぎ話としての形が整えられました。私たちが慣れ親しんできた昔話は時代背景や世相に伴い、何度となくその姿を変えてきたのです。私たちが幼い頃の絵本と今の絵本とでも、物語の内容は異なっているようです。確かに、夜寝る前に「化け物が出てきて意地悪婆は八つ裂きにされた」なんて聞かされたら、子どもたちは怖くてたまらないですよ。

私たちが当り前に知っている昔話のストーリー、それが実は大筋以外原典と異なっているとわかったら、興味がわいてきませんか。ひとつの昔話を時代別いくつか読み比べてみるのも、新たな発見があってももしろいかもしれませんね。そこには昔話の意外な一面がきっとあるはずです。大人になった今だからこそ、新しい視点から「本当」の昔話を読んでみてはどうでしょうか。

あいかわ みずほ（中国語学科4年次生）

